

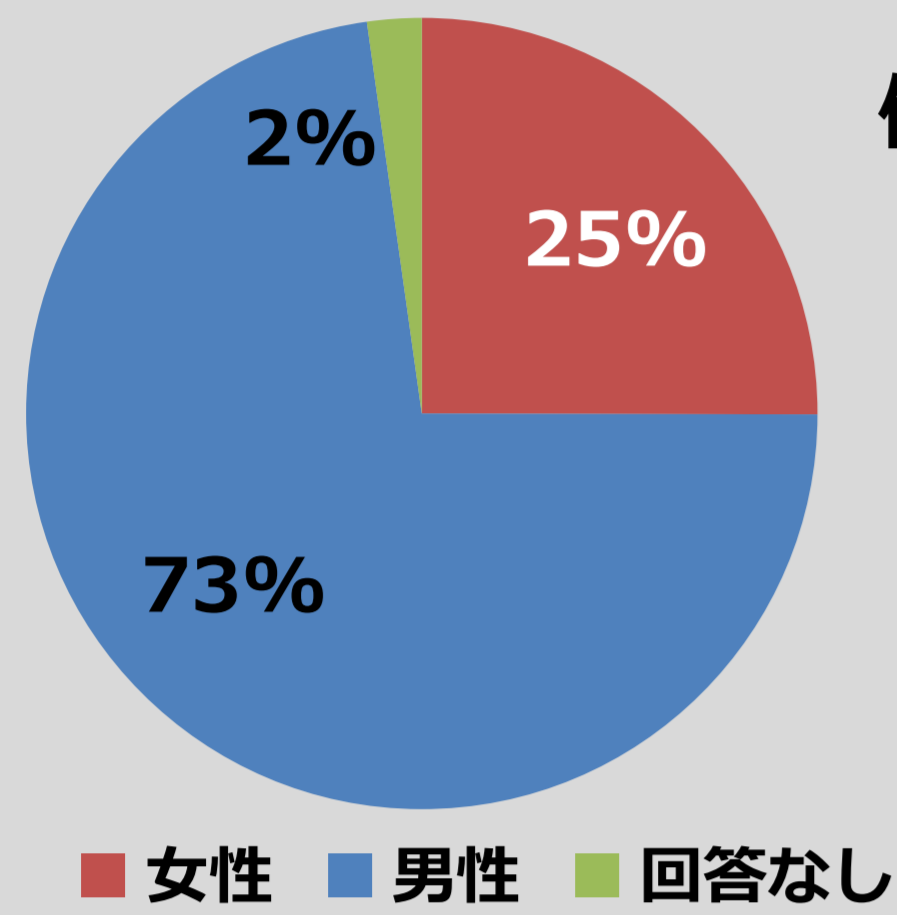
疑問：シンポジウム・ワークショップなどのオーガナイザー・口頭発表者における女性比率は、学会員全体における女性比率と比べて低いのではないのでしょうか？

大学や研究機関での男女共同参画を推進するために、学術研究発表の場である学会の大切な役割の一つは、優れた研究に対して、性差などに関係なくより積極的に発表し、評価される機会を創出することである。上記の疑問をもとに、日本分子生物学会キャリアパス委員会は、年会発表者が属する性(属性)について、2009年度(男女共同参画委員会/当時)から継続調査を行っている。今年ConBio2017における結果をまとめた。

ConBio2017における属性調査

今回は5,695名が調査対象となった(のべ人数)。大会の演題登録システム(日本語版・英語版)にアンケート設問を設置(回答は任意)。性別、年齢、所属、職階(身分)について、発表者には投稿時に協力して頂いた(5,375名。Late-Breaking Abstracts投稿分は含まない)。一部のオーガナイザー等に関する調査では公開情報や本学会会員データ(学会個人情報保護方針に依拠)なども併用した。

日本分子生物学会会員の男女比率(2017年9月30日 現在) 学会発表への参加の仕方(分子生物学会・生化学会会員のみ)



個人会員全体(12,845人)

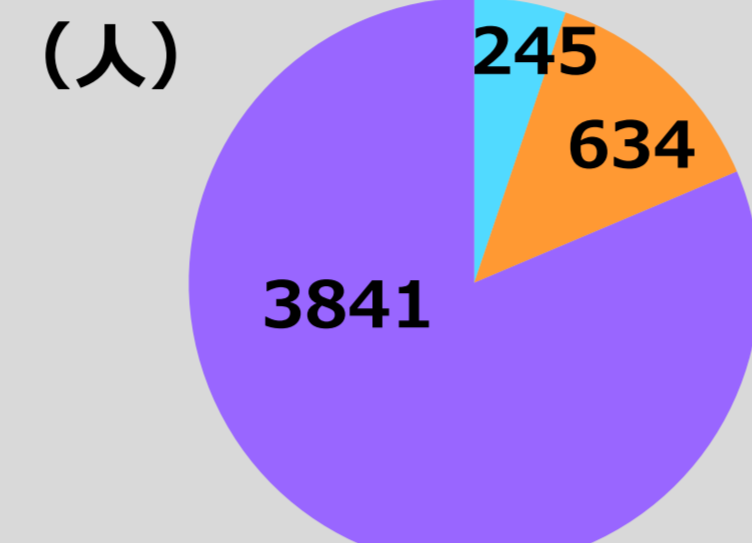
会員種別別女性比率:
正会員20% 学生会員37%

※分子生物学会の個人会員:
正会員・学生会員・
シニア会員・次世代教育会員

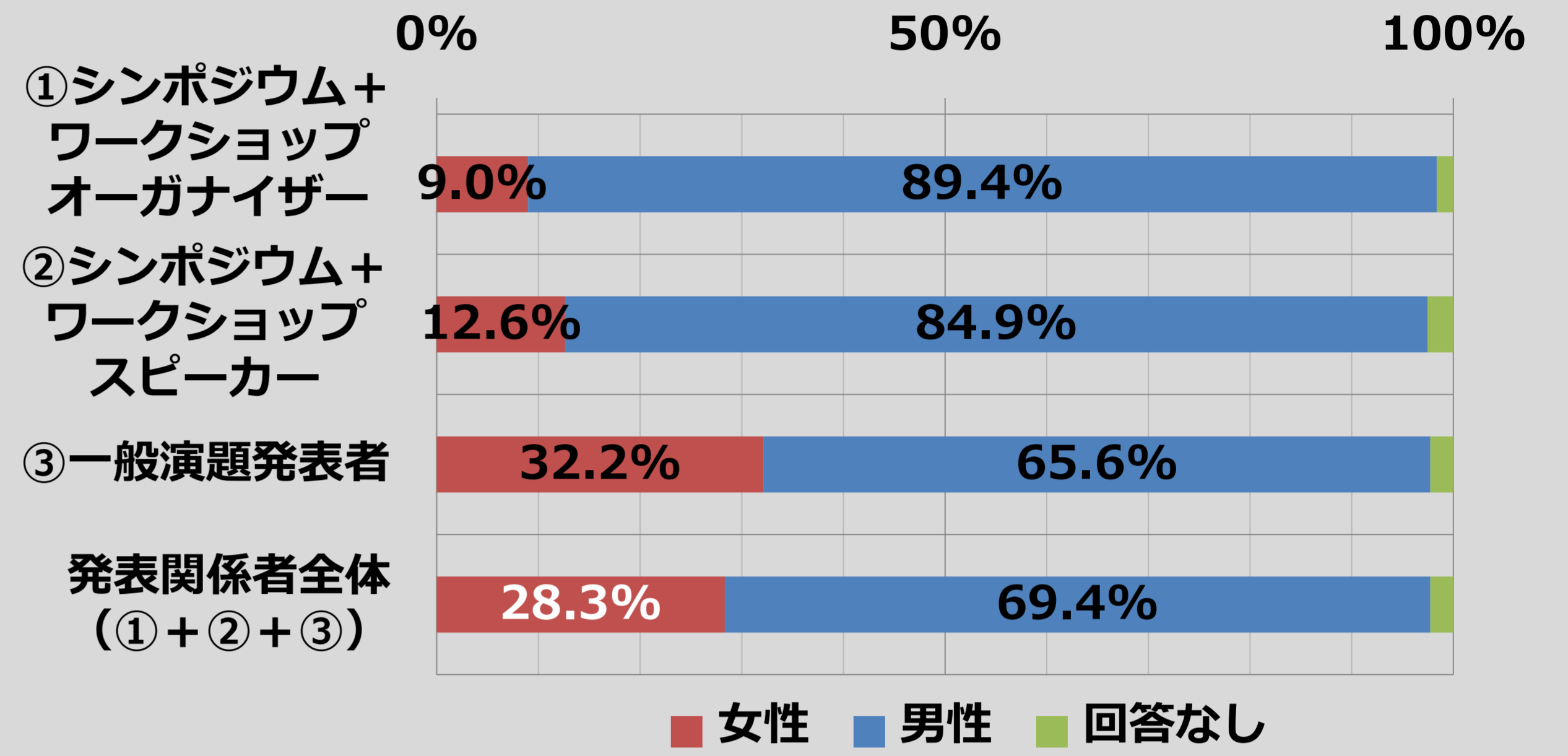
■女性 ■男性 ■回答なし

※日本生化学会の個人会員における男女比率もほぼ本学会と同様で、正会員+学生会員中の女性の割合は**22%** [正会員21%・学生会員37%]

出典「連絡会加盟学協会における女性比率に関する調査」(男女共同参画学協会連絡会、2017年)

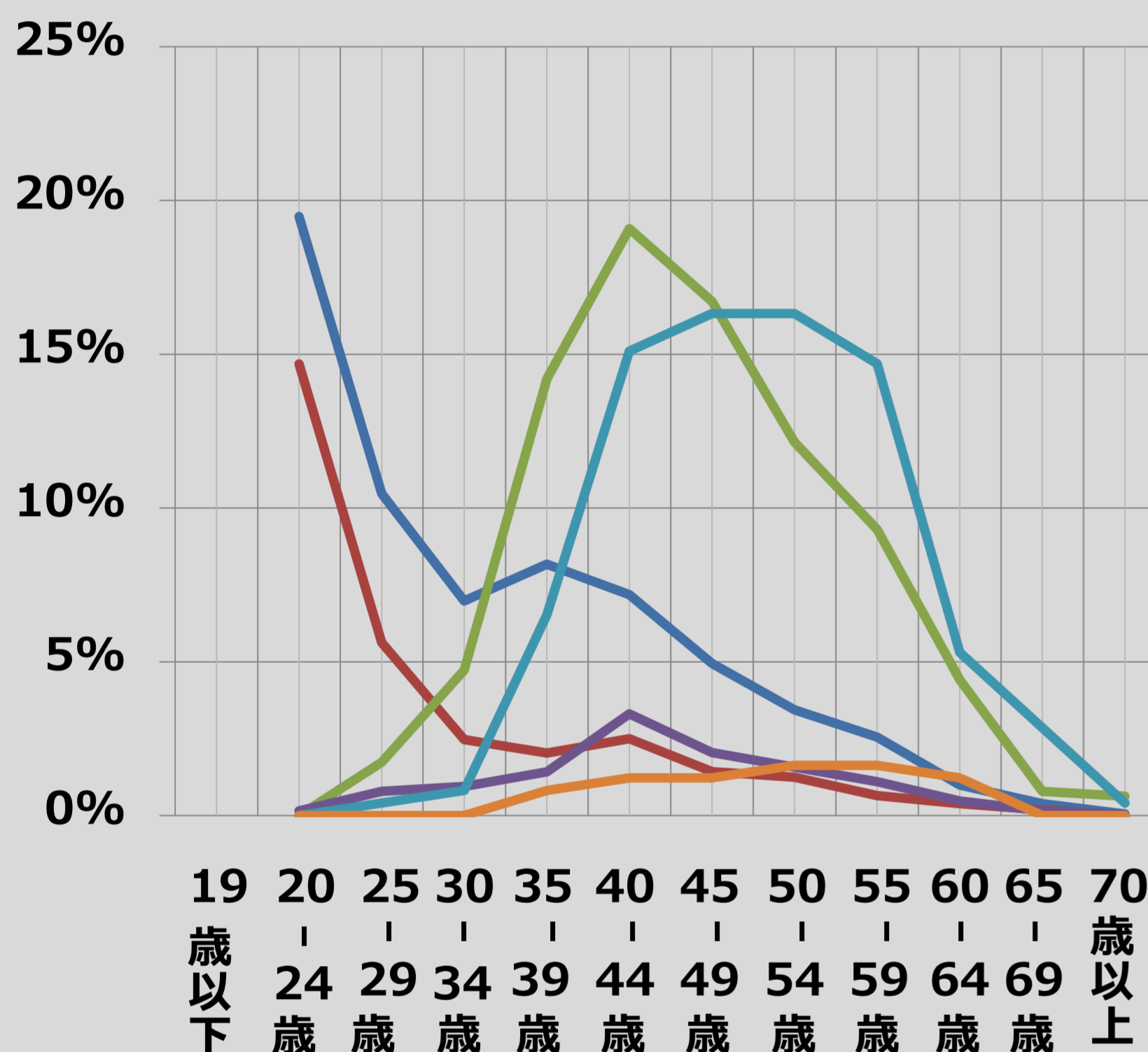


■①オーガナイザー(S+WS) ■②スピーカー(S+WS) ■③一般演題発表者

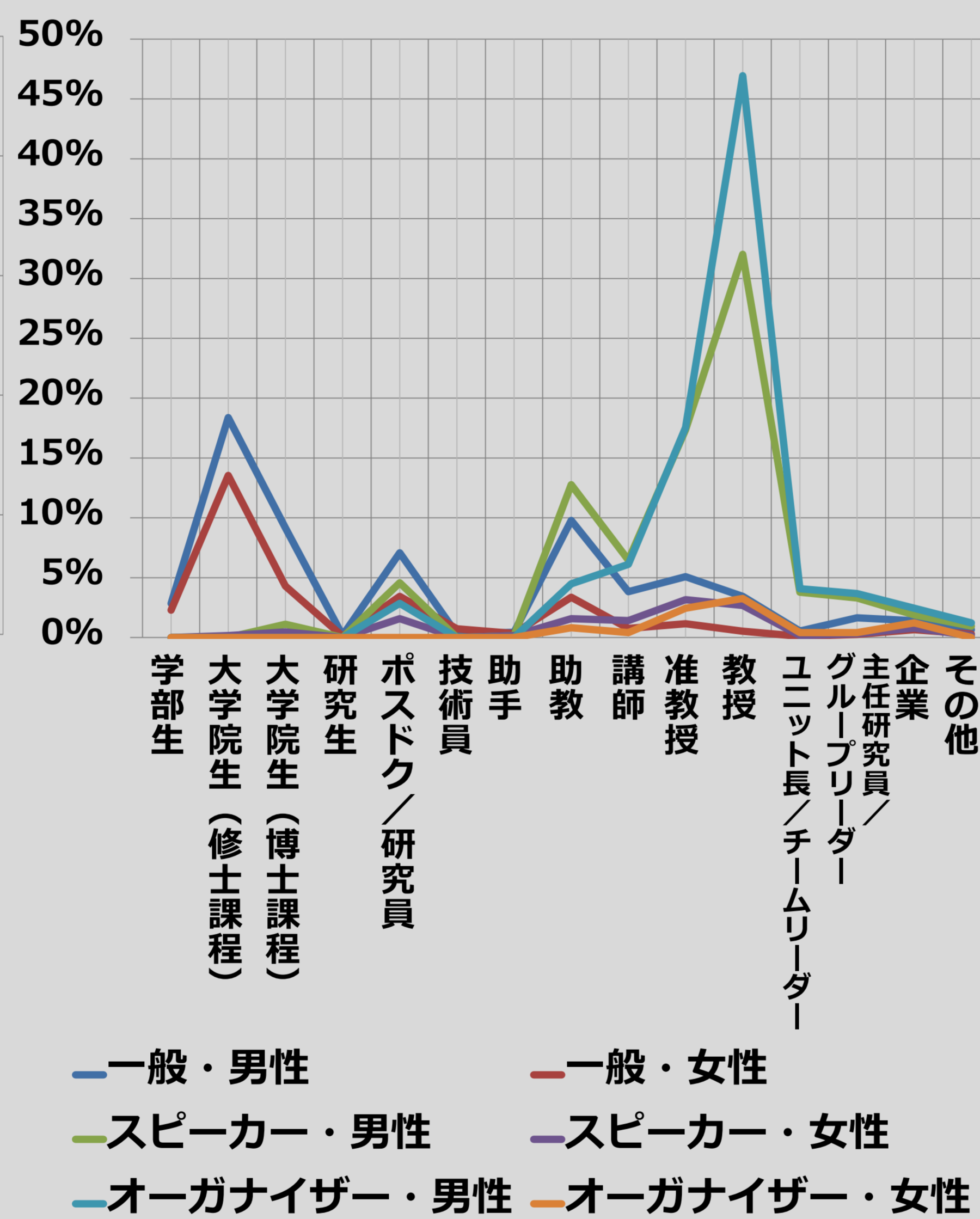


発表関係者全体における女性比率は個人会員全体における女性の割合に近い

年齢と発表カテゴリーとの関係



職階と発表カテゴリーとの関係

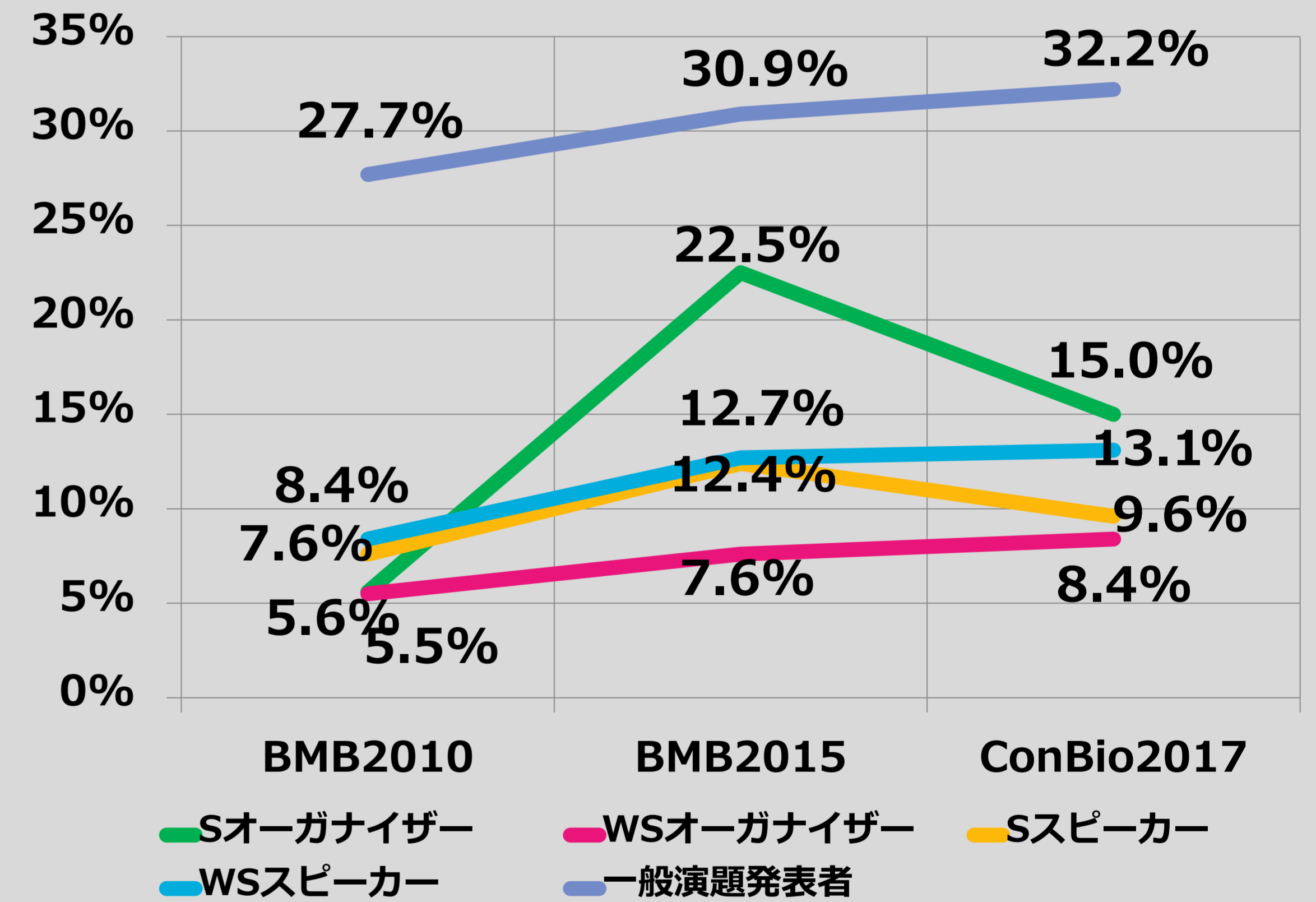


※分子生物学会・生化学会会員のみ
※スピーカー・オーガナイザーは(S+WS)
※「回答なし」を除く

発表者が決まるプロセスの違い

- シンポジウム(S)
オーガナイザー：大会側が検討・依頼(他薦)
スピーカー：オーガナイザーが検討・依頼(他薦)
- ワークショップ(WS)
オーガナイザー：応募者(自薦)の中から選ばれる
スピーカー：オーガナイザーが検討・依頼(他薦)
- 一般演題発表者：自発的な申し込み(自薦)

各カテゴリーにおける女性比率の比較



発表関係者全体における女性比率が個人会員全体における女性の割合に近い値を示しているのに対し、スピーカーやオーガナイザーにおける女性比率は、それを下回っている。冒頭に掲げた疑問については、調査の結果、事実であることが数値で確認された。この結果は発表関係者に関する分子生物学会・生化学会会員のみのデータと共催・協賛学会等を含めたデータのいずれでも同様であった。女性・若手研究者を学術集会の場で今後どのように活かすかが、引き続き運営側の課題となる。

一方、調査開始後間もない頃と比較して、調査結果の内訳には変化が認められる。今大会は特殊な開催形式であるため過去のデータとの厳密な比較は難しいが、今大会に分子生物学会または生化学会の会員として参加する発表関係者のデータを、同2学会の合同大会であったBMB2010・BMB2015と比較してみると、自薦のカテゴリーについて女性比率に全体的な上昇傾向が認められる。中でも、わずかながら公募ワークショップのオーガナイザーとして女性が増えたことは、女性研究者自身の意識の変化との関連性などにも着目しつつ、今後も注視していきたい。

【参考】ConBio2017の発表に関係する学会会員等の内訳

ConBio2017には、主催の分子生物学会・生化学会、共催のFAOBMB、37の協賛団体が関係しており、そのいずれかの団体の会員は主催学会の会員と同じ条件で同大会への参加・発表が可能である。本大会へ事前参加登録をする際には自身が所属する学会のうちの1つを申告することになっており、各発表者カテゴリーに関してはその申告内容に従って所属学会を振り分けた。またワークショップのオーガナイザーからは企画応募時に最大3つまでの所属学会申告を受けており、その1番目の記載学会を採った。シンポジウムには「分生・生化企画」と「協賛学会企画」の枠を設け、後者については協賛学会に1枠ずつ企画を募り、オーガナイザーの選定等も行うよう依頼がなされている。本大会では、「協賛団体会員」の中に分子生物学会会員でもある参加者が相当数含まれていることに留意する必要がある。

